

【概要・目標】

超音波検査による出生前診断の進歩と普及により、筆者の専門とする新生児外科学の対象である先天性外科疾患のほぼ三分の二の症例が出生前診断されるようになった。また、新型出生前診断(NIPT)などの血清学・血液学的検査の進歩により胎児の染色体異常が、まだ胎児をわが子として認識できるより早い時期に診断されるようになった。従って、周産期医療の現場では、出生前診断された先天異常児の妊娠を継続させるかどうかは日常の問題となり、倫理的考察が不可欠となった。

一方、われわれ医療従事者は、生と死と常に隣り合わせていながら、死をどう捉えて良いかをよく理解していない。現代の医学教育で教えられていない死生学、即ち死にまつわる現象に照準し、そこから生を捉え直す学問としての死生学、の触りを考えてみたい。

【授業内容・スケジュール】

1. 生命倫理とは何か？ 生命倫理の基本原則：治療を決めるのは誰か？
2. 周産期医療と生命倫理：周産期医療になぜ生命倫理が必要か？
3. 討論「周産期医療に何故生命倫理が必要か？」
4. Informed consent (IC) と生命倫理
5. Narrative-based Medicine (NBM) とは何か？
6. 新型出生前診断 (NIPT) を考える (一)：NIPT と生命倫理
7. 新型出生前診断 (NIPT) を考える (二)：NIPT と NBM
8. 出生前診断の光と陰
9. 討論「出生前診断の光と陰～NIPT がもたらすもの」
10. 連続性と不連続の思想と生命倫理
11. 多様性と優生思想
12. 和の思想と生命倫理
13. 死生学入門：キューブラー・ロス著『死ぬ瞬間』より「死に至る人間の心の動き」
14. 死生学入門：看取りの医療とスピリチュアルケア
15. 討論「死んでゆく人にどう声を掛けるべきか？」

【評価】

毎回の出席状況 (20%)、各セミナー後のレポート (80%)

【テキスト】

窪田昭男、他編著『周産期医療と生命倫理入門』（メディカ出版）

【推薦参考図書】

仁志田博司著『出生と死をめぐる生命倫理』（医学書院）

坂井律子著『いのちを選ぶ社会』（NHK 出版）、松田一郎著『生命倫理ノート』（日本評論社）

清水哲郎・会田薫子編『医療・介護のための死生学入門』（東京大学出版会）

石丸昌彦『死生学入門』（放送大学教育振興会）、キューブラー・ロス著『死ぬ瞬間』（中公文庫）

玉置妙憂著『死に行く人の心に寄りそう』（光文社新書）

【その他】

連絡先：kubota@wakayama-med.ac.jp